令和６年度

目黒日本大学中学校
入学試験問題

国　語

試験時間 50分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全13ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄（らん）に記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者（かんとくしゃ）に知らせてください。
- 試験終了（しゅうりょう）後、監督者の指示にしたがって問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 問題冊子および解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとします。

受験番号	氏　　名

一

次の各問いに答えなさい。

問1 次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

① 従業員の横領が発覚した。

② きみをだますつもりは毛頭ない。

③ あの人は強欲だ。

問2 次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

① かれは笑いジョウゴだ。

② 職員として会社にサイヨウされた。

③ 将来の夢はケンサツ官だ。

問3 ①・②の□にふさわしい言葉を後から選び、ことわざを完成させなさい。

① 立つ□跡(あと)を濁(にご)さず

ア 猫(ねこ)　イ 鳥　ウ 虫　エ 者

② □の不養生

ア 農家　イ 商人　ウ 侍　エ 医者

問4 次の空らんに当てはまる言葉を後から選び、記号で答えなさい。

① 彼女は人目を（　　）ことなく、派手な服装で出て行った。

ア はる　　イ はばかる　　ウ はかる　　エ そしる

② 弟のいたずらは（　　）ものがある。

ア 耳に聞く　　イ 目に余る　　ウ 足がつく　　エ 顔を知る

問5 次の文のぼうせん部のうち、意味が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今年こそ富士山に登ろう。

イ 彼は今ごろ試験会場にいよう。

ウ 桜が咲いたら美しかろう。

エ いつかすばらしい時代が来よう。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

世界には、赤ん坊が成長し、しゃべれるようになるまではその名を呼ぶことのない社会もあるそうだ。自分の足で立ち、ことばがある程度理解できるようになって初めて名前が呼ばれるらしい。それまでは彼・彼女らは①「人」として認められないという。

文化人類学者の奥野克巳氏によると、ボルネオに住むプナンといわれるひとびとがそのような習慣を持つ。氏は「周囲の人びとからその名前で呼ばれるようになって、その子は初めて『人』と成る」と報告している（「名前と存在」）。「あの赤ん坊がしゃべれる（つまりは返事ができる）ほどに成長した」とまわりが判断したとき、その名が呼ばれ、彼・彼女の存在は認知される。「人として存在」するためには、呼ばれた名前に意志を持って応じられることが必須とされるわけだ。彼らからするとわたしたちの社会は赤ちゃんに優しいとも甘いともいえる。

いずれにしても、呼び声への反応が共同体のメンバーとして迎え入れられる※契機となることにかわりはなさそうだ。

すこし逆の面から考えてみよう。痛ましい話ではあるものの、その命を終えようとする者、また事故や病気で反応のままならない患者に向かってもわたしたちはその名を呼びかける。そして、彼・彼女が手を握り返してくれたかのように感じては喜び、わずかにでも動く唇や瞼をみてその命の存在を確かめる。それは、彼・彼女がまだわたしたちの側にいることの確信でもある。

呼びかけに応えることは、いうなれば命がその責務を果たそうとしている証ではないのか。

それが命の責務であるとするなら、わたしたちの生は「いかにその※召喚に応えるか」を問われているに違いない。自分の名を呼ぶ者への返答は自らの生の歩みそのものだ。

問題は、現代では個人の名が呼ばれることが劇的に減じていることだ。個人名が尊重されているようでいながら、じつはそれが記号でしかない場面にしばしば出くわす。今やあらゆる職場で見かける首からぶら下げられたネームホルダーはその最たるものだ。それは特定の個人ではなく、誰がしても同じ結果になる（ならねばならない）働きに対し、責任の所在を明らかにするために考案されたものにほかならない。当事者が、②顔の見えない記号としての存在であるがゆえに、個人名を開示せざるを得ない、という※パラドクスといえよう。

現代社会の病理は「かけがえのない存在としての名前」が呼ばれなくなったことにその根があるように思える。

もとより芸術を志す者はそんなことは承知のうえでその道を歩み始める。ことに※キャリアの始まりは、その名を呼ばれることのほうが※稀だ（ゴッホですら、生前その名を認められることはなかったのだから）。若き芸術家は文字通り「お呼びでない」。芸術大学を卒業したばかりの実績のない自称芸術家がその名前を呼ばれず、※悶々とした日々を過ごすであろうことは容易に想像できよう。

それでも彼らは誰かに声をかけられることを待つしかない。もちろん単に待ちさえすれば声がかかるほどに甘い世界ではない。※世界をして自らの名を呼ばしむる活動を、孤独のなかで黙々と遂行する覚悟が必要だ（むしろそれを苦に思わない者しかこの世界には残れない）。その積み重ねのなかからようやく彼・彼女の名を呼ぶ理解者が現れる。こうして徐々にその名が、ひとびとの口に上り芸術家は芸術家としてその存在を確立する。

芸術家が歩む道程の［X］的な現象を述べるなら、この説明は紛れもない事実だ。多くの名の知られた音楽家、画家、アーティストはこのようなプロセスをたどってその輝かしいキャリアを築いてきたことだろう。

だがじつは、芸術を志す者に向かって真にその名を呼ぶ者は、理解者でもなければ※プロモーターでもなければ画商でもなければ取り巻くファンでもない。

もしわたしたちが芸術を、そして音楽を本当に愛しているのだとしたら、わたしたちの名を呼ぶ者は芸術（音楽）そのものであるはずだからだ。わたしたちは③その声に気づいているだろうか。いや気づかなければこの道を進むべきではない。芸術（音楽）それ自体からの※誘いだけがわたしたちを真の芸術世界へと導いてくれる。プロであれアマチュアであれ、その呼び声を聴きもらした者が作品の奥深くに踏み入ることは不可能だ。

すでに読者はお分かりのことと思うが、バッハやモーツァルトの作品の一つ一つは彼ら自身の創作物ではない。そうではなく、その音楽自身が彼らの名を呼び、彼らをして楽譜にしたためさせたものだ。「バッハよ、あなたはどこにいるのか。私を楽譜に記し、世界にこの私の存在を知らしめなさい」という音楽それ自身からの呼び声をバッハは聴いたはずだ。

そして彼の残した音符を通し、わたしたちもまた声をかけられている。「〇〇〇〇よ、私を現実の音としてこの地上によみがえらせなさい」と。

その呼び声を聞き取った者は「はい、わたしはここにおります」と、求めに従わねばならない。呼ばれた者には呼びかけに応える責務が生じるからだ。呼びかけに応じることが人の存在の核心であるなら、それを拒絶することは自らその存在の根拠を揺るがすことになってしまう。

※旧約聖書によれば、アダムは禁断の果実を食した後、神の呼びかけに応じず木のあいだに隠れた。それゆえに彼は神から呪われエデンを追われる。一方、神の呼びかけに応じ、その理不尽な求めに抗うことなく即座に従ったアブラハムは子々孫々の代にまで大いなる祝福を受ける。

神ならぬ芸術（音楽）からの招きに④わたしたちは応えようとしているだろうか。

それがどれほど小さなささやきであったとしても、「わたしの名を呼ぶ者の声」を聴き逃さないでいたいものだ。

（大嶋義実『演奏家が語る音楽の哲学』）

※契機……物事が始まったり，変化が生じたりする直接の要素や原因。きっかけ。動機。
※召喚……人を呼び出すこと。
※パラドクス……ふつうの理解に反していながら、真理を表している表現のこと。
※キャリア……経歴。経験。
※稀……数がきわめて少ないさま。めったになく、非常に珍しいさま。
※悶々……悩み苦しんでいる精神状態。
※世界をして自らの名を呼ばしむる活動……「世界に自らの名を呼ばせる活動」という意味。
※プロモーター……中心となってものごとを運営する人や団体のこと。
※誘い……さそうこと。さそい。
※旧約聖書……ユダヤ教の正典を自己の正典の一部としたキリスト教における名称。

問1 ぼうせん部①「『人』として認められない」とあるが、これは具体的にはどういうことか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ことばがある程度理解できるようにならないと、プナンでは相手にされないということ。
イ　呼びかけに対し返事ができるようにならないと、プナンでは赤ん坊として扱われるということ。
ウ　名前を呼ばれるほどに成長していないと、プナンでは存在しないものとされるということ。
エ　意志を持って応じないと、プナンでは社会の一員として受け入れられないということ。

問2 ぼうせん部②「顔の見えない記号としての存在であるがゆえに、個人名を開示せざるを得ない」とあるが、この表現について説明した次の文章の空らん［い］・［ろ］に当てはまる表現を、これより前の本文中から指定の字数で探し、それぞれぬき出して答えなさい。

社会では、個人の［い（八字）］で、個人は尊重されているが、現在はそれが少なくなっている。ネームホルダーは個人の［ろ（五字）］をはっきりとするために利用されているだけで、個人を尊重しているわけではないということ。

問3 [X] に入ることばとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　表面　　イ　内面　　ウ　側面　　エ　裏面

問4 ぼうせん部③「その声」とあるが、これを具体的に説明したものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　芸術からの、孤独に耐(た)えつつ努力を続ける芸術家に対する、助けの手をさしのべる応援(おうえん)。
イ　芸術からの、創作活動をしている若い芸術家に対する、理想に近づくことを求める期待。
ウ　芸術からの、音楽を現実の音によみがえらせる芸術家に対する、聞き取ってくれたことへの感謝。
エ　芸術からの、すべての芸術家に対する、作品を実現させることを求める、強制力のある依頼(いらい)。

問5 ぼうせん部④「わたしたちは応えようとしているだろうか」とあるが、この表現に込められている筆者の考えとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　芸術からの声を聞き取らない芸術家は、作品を世に出すことはできない。
イ　芸術からの声を聞き逃してしまうと、自身の存在を確立することができなくなる。
ウ　芸術からの声を聞き逃さないことによって、芸術の存在を多くの人に広められる。
エ　芸術からの声に応じることで、子々孫々の代までの繁栄(はんえい)を築くことができる。

問6 本文の内容として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　あらゆる社会問題の根源は、孤独のなかで黙々と創作活動を遂行する覚悟が欠けていることである。
イ　有名な音楽家の作品は、音楽からの呼びかけに応じたことで世代をこえて多くのファンから愛された。
ウ　自分の所属する社会や芸術からの呼びかけに応じることができない人は、命の責務をまっとうしていない。
エ　待っていれば誰かから声がかかるほど、人生は甘くはないということを芸術家は当然知っている。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小さなころからしつけに厳しい家庭で育った主人公は、ある日南條亭というところでたまたま聞いた、桂夏之助という落語家の※噺の中に出てくる「アホ」な人物たちに魅せられ、自身も落語家になりたいとこころざし、夏之助の弟子となり「甘夏」という名をもらった。

初めて稽古をつけてもらったネタは、『東の旅　発端』という噺だった。上方落語では、入門したての弟子は、どの一門でも、まず間違いなくこのネタから教えられる。※ハリ扇と小拍子を左右の手に持って、見台と呼ばれる台を叩きながら演る。

師匠の稽古のスタイルは、いわゆる「三べん稽古」。師匠がまず、ネタの、ある程度のところまでを、三べん、繰り返してやる。師匠が三べんやるうちに、弟子はその部分を覚えねばならない。

「ようようあがりましたわたくしがしょせきいちばんそうでございまして、おあとにばんそうにさんばそう、よばんそうにはごばんそう、ごばんそうにおじゅうじにはたにてんがい、どらににようはち、かげどうろうにしらはり、と、こないもうしますと、こらまあそうれんのほうで……」

師匠は、そう、三べん繰り返したあと、弟子に言う。

「やってみ」

覚えられない。覚えられるものでない。そもそも、言ってる意味がまったくわからない。

まるで外国語だ。

これが、落語なのか。あの、アホが出てくる、と憧れた、落語なのか。

①甘夏は、目の前が真っ暗になった。

アホを演じたくて落語の世界に入ったのだ。アホが出てこない、ただの呪文みたいな話は、甘夏には苦痛でしかなかった。それでも必死になって覚えようとした。しかし、やはり覚えられない。

「ようようあがりましたわたくしが、しょ、しょ、しょ、えーっと」

「えーっとは要らん！　そんな初っ端から覚えられんでどないすんねん！」

師匠の怒号が飛ぶ。

ほとんどワンフレーズごとにつっかえる。五分、十分、二十分と経っても稽古が前に進まない。師匠の怒鳴り声が続く。どうしようもなく情けな

い気持ちになる。甘夏の目から頬に一筋伝った涙が、ついにはぼろぼろと濁流になって溢れ出る。

「泣いてどないすんねん！」

最初のうちは怒鳴っていた師匠も、そのうちに甘夏が泣くと、何も言わずに目をつぶり、腕組みして黙ってしまうようになった。

甘夏の後ろで自分の稽古の番を待っている若夏はいつも呆れ顔だ。

三ヶ月入門が早い若夏は、甘夏が泣いて稽古が中断するのが、じれったくてたまらない。

「師匠、もう、こんな奴、後回しにして、先に私の方、教えとくなはれ」

その度に、師匠は言った。

「若夏、まあ、そう言うな。気がすむまで泣かしたらええ。甘夏が泣き止むまで、ちいと待ったれ」

師匠のその言葉に、②甘夏はまた泣いてしまうのだった。

そんな日が毎日続いた。

それでもなんとか食らいついた。意味などわからず、とにかく師匠の言葉を完全コピーする。そうして覚えていくうちに、二ヶ月ほどすると、言葉のリズムが自分の口に合うようになってきた。そうなると、言葉の覚えも早くなる。なるほどこの噺は落語の発声と間とリズムを身につけるためのものなのだと、遅まきながらようやく悟った。

師匠は稽古を始める最初の日に言った。

「このネタを最初に覚えるのはな、これから自分なりの落語という壮大な建物をこしらえていく上での、いわば③基礎工事のようなもんや。基礎工事がちゃんとできていないのに、建物に壁を塗ったり畳を敷いたりはできんやろ」

二ヶ月ほど経って、ようやくその意味が朧げながらわかってきた。

ただ、そうとはわかってきても、面白くないものは、やはり面白くない。

つっかえながらも、なんとかようやく最後まで覚え、次に教えてもらったネタが、『つる』だった。

甘夏は喜んだ。この噺には、アホが出てくる。

初めて南條亭で落語を聞いたとき、名前は忘れたが、誰かが『つる』を演っていた。

大笑いしたが、同時に、こんなんやったら自分でもできる、と思った。

④ところが大違いだった。

噺自体は単純なものである。

※横町の物知り、甚兵衛さんから「つる」の名前の由来を聞いたアホ、「つる」は昔、「つる」とは言わず「首長鳥」と言った。それがなんで「つる」と呼ばれるようになったかというと、はるか唐土の彼方から、まずは、首長鳥のオスが「つー」と飛んできて、浜辺の松にポイと止まった。そのあと、メスが「るー」と飛んできた。それで「つる」だという。これはおもろい、とばかりにアホは町内に吹聴しに行くが、うろ覚えのために、最初は、「オスが、つるーっと飛んできて」と言ってしまって後が続かず絶句し、失敗する。甚兵衛さんに確認に戻って出直すが、今度はオスが「つー」と飛んできて「る」と止まった、と言ってしまい、ほな、メスはどないしたんや、と突っ込まれて、またまた往生する。

それだけの話だ。

『つる』を初めて習うという日、師匠はまず、甘夏の前で『つる』をひと通り演ったあと、こう言った。

「無邪気な噺やろ。けど、この短い噺にはな、落語の大事な要素が、全部入ってんねんで。話術の、ほとんどのエッセンスが入ってるんや。説いて聞かせる、軽く流す、相手の言葉にかぶせる、外す、戸惑う、話を運ぶ、強く押し出す、声の調子で空気を変える……。それにサゲのバカバカしさ。まあ、これから一つずつ、追い追い教えていくけど、この噺を上手に演れたら、大抵のネタはできる。こんな噺は前座噺やとバカにする者もおるけどな、大ネタは、噺の力で、かえって演りやすい。こんなネタこそ、難しい。⑤落語はな、『つる』に始まり、『つる』に終わるんや。これをしっかりできるようになりなさい」

「はい！」

『つる』は全体で十五分ほどの噺だ。師匠はそれをいつも通りの「三べん稽古」で少しずつ区切って丁寧に教えてくれる。師匠が三回続けて演った後に、甘夏が演ってみる。その都度、細かく厳しいダメ出しがある。

叱られまくりながら、なんとか「前半」「中盤」と来て、今日、ようやく「終盤」のサゲまで来た。

兄弟子の若夏は今日はいない。のびのびと集中してできる。一緒に稽古する方が、相手が教えてもらっている間に覚えることもできていいのだが、甘夏は師匠と一対一で稽古をつけてもらう方が好きだった。

師匠は言った。

「ええか、甘夏、このネタの、肝心なところは、サゲやで。やってみなさい」

甘夏はサゲの部分を、師匠が今、目の前でやった通りに演ってみた。

「後へさしてメスがやで、おまえ」

「メスが、どないしたんやねん」
「黙ーって、飛んできたんや」
アホが、答えに窮して、苦し紛れにこぼすのだ。
「うん、まあ、そんなとこやな」
師匠が意外にもすんなりオーケーを出したので、甘夏は逆に不安になった。
「え？　今ので、ええんですか？」
「なんでや」
「なんか、ダメ出ししてもらわんと、頼りのうて……」
夏之助が笑った。
「そうか。頼りないか」
「い、いえ、師匠の稽古が頼りないっていう意味やないんです！　私の気持ちが、頼りないっていう……」
「わかってる、わかってる」
⑥師匠はさらに目を細めて頬を緩めた。
「うん。おまえがそう言うんやったら、普段はやらんが、今日は、もうちょっと深いとこまで、一緒に考えよか」
一緒に考える？　師匠と一緒に考える？　どういうことだ？
「サゲの『黙ーって、飛んできたんや』。ここは、今みたいに、答えに窮して、苦し紛れに言う。まあ、これが模範解答としよか。けどな、他にも、言い方があるんやないか。たとえば、照れながら言う、というのはどうや。それから、悲しそうに言う、というのも、ないことはないんちゃうか。甘夏、おまえなら、どう言うのがええと思う？」
どう言うのがええと思う？　突然師匠に質問されて、甘夏は戸惑った。
「あの……、すんません、わかりません。師匠が演りはったんが、一番……」
「甘夏、これを、今、おまえに言うのは、まだ早い。けど、あとあとのために、覚えとき。落語には、笑いを取るために外したらいかん約束事がある。けどな、同時に落語は、一から十まで師匠に教えてもろうた通りに演ったらええというもんでもない。もしおまえがこの先、『夏之助師匠にそっくりやなあ』と言われたとしたら、それは誉め言葉やないで。落語に、これが絶対不変の正解、というのは、あらへんのや。ただ、演るときに

は、自分なりの正解は持っとかな、あかん。どう演るにせよ、自分のなかで筋がちゃんと通ってたら、それでええんや。まだ入りたての者に、本来やったら、そこまでは言わん。まずは師匠の言う通りにできるようになるのが何よりも先や。けど、おまえは、そのままは頼りない、と、言うた。そう思うのは、大事なことや。忘れんとき」

師匠の言葉は意外だった。落語に、絶対不変の正解は、ない……。それは、大きな自由を与えられたような気がした一方で、広い野原に突然放り出されたようで、甘夏はとてつもなく不安になった。

「師匠、わかりません。どうしたら一番ええか、教えてください」

「これは、宿題にしとこか。もうちょっと、自分で考えてみ。この『つる』の噺を、どう収めるか。つー、と飛んできて、る、と止まるように、この話を、うまいこと、松の枝に、止まらしてみ。さあ、今日の稽古は、このへんにしとこ」

甘夏は、答えがわからない。⑦甘夏の頭の中で、つるは着地できる場所を見つけられずに、ずっと飛び続けているのだった。

（増山実『甘夏とオリオン』）

※噺……落語の演目（ネタ）のこと。

※ハリ扇・小拍子・見台……落語で用いられる小道具。扇は右手に、小拍子は左手に持ち、体の前に置かれる見台に打ちつけ、噺の合いの手などに使ったり、雰囲気を変えるために使ったりする。

※横町……表通りから横へ入った通りのこと。

問1 ぼうせん部①「甘夏は、目の前が真っ暗になった」とあるが、このときの甘夏の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　師匠の期待に応えられない自分を情けなく思っている。

イ　落語に対して持っていたイメージがくずれて絶望している。

ウ　アホが出てこない落語を教える師匠に怒りを感じている。

エ　落語に対する憧れが間違いだったと気づいて入門を後悔している。

問2 ぼうせん部②「甘夏はまた泣いてしまうのだった」とあるが、この理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　師匠にどなられたうえに兄弟子にもばかにされ、自分には落語が向いていないのかと思って悲しかったから。
イ　稽古が進まないことに加えて、師匠から優しい言葉をかけられたことで自分のふがいなさが痛感されたから。
ウ　あこがれの落語の世界に入門できたのに、最初に教わる噺すら満足に覚えられないことがくやしかったから。
エ　進歩のない自分に対して師匠が辛抱強くつきあってくれることで、期待されていると感じて嬉しかったから。

問3 ぼうせん部③「基礎工事」とあるが、ここで師匠が基礎工事と言っているのは、落語のどのようなことか。本文中から十字程度で探し、ぬき出して答えなさい。

問4 ぼうせん部④「ところが大違いだった」とあるが、この内容を「ことわざ」で端的に表現したものとして最もふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　弘法にも筆の誤り
イ　木を見て森を見ず
ウ　帯に短し、たすきに長し
エ　言うは易し、行うは難し

問5 ぼうせん部⑤「落語はな、『つる』に始まり、『つる』に終わるんや」とあるが、師匠がこのようにいう理由としてふさわしいものには○、ふさわしくないものには×で答えなさい。

ア　落語に大事なあらゆる要素が入っているから。
イ　前座噺の中でも難しい部類に入るものだから。
ウ　サゲがバカバカしくて無邪気で短い話だから。
エ　演じる者の話術次第で良くも悪くもなるから。

問6 ぼうせん部⑥「師匠はさらに目を細めて頬を緩めた」について、夏之助師匠は何に対して「目を細めて頬を緩めた」のか。二十字以内で答えなさい。

問7 ぼうせん部⑦「甘夏の頭の中で～ずっと飛び続けているのだった」とあるが、この表現についての説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 『つる』という噺の収め方に悩(なや)む甘夏の姿が、噺の中にでてくる「つる」が着地する松の枝を探し求めて飛び続ける姿に重ね合わせられている。

イ 甘夏の頭の中でイメージされる「つる」が飛び続ける姿に、噺の中の「つる」をどこに着地させるべきか決断できない甘夏の迷いが暗示されている。

ウ 夏之助師匠が教えてくれた通りに演じることを禁止されてしまった甘夏の苦悩(くのう)が、松の枝に止まれなくなった「つる」の姿によって表現されている。

エ 大空を優雅(ゆうが)に飛び続ける「つる」の姿に、夏之助師匠の言葉によって『つる』の演じ方に自由を与(あた)えられた甘夏の無限の可能性が反映されている。

問8 二重ぼうせん部「落語に、これが絶対不変の正解、というのは、あらへんのや。ただ、演るときには、自分なりの正解は持っとかな、あかん」とあるが、あなたの生活の中においてこの言葉があてはまる事例はどのようなものか。以下の条件をふまえて書きなさい。

【条件1】「落語」以外で、あなたの生活の中の、どのような状況(じょうきょう)での事例かを明確に書くこと。

【条件2】「自分なりの正解」がどのようなものかを明確に書くこと。

【条件3】「自分なりの正解」について、なぜそれが正解であるのかという理由も書くこと。

【条件4】条件1～3をふまえて五十字以内で書くこと。（一文でなくてよい）

以下余白